

時々クトウルフのほの  
ぼの日常

悠はる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

悠人の日常を書いた物語

ごく稀にシナリオのリプレイ

# 目次

そこは、日常ではなかった | 1



## そこは、日常ではなかった

部活から帰っていると目の前に黒いフードの人物がいた。

少し恐怖を感じていた。恐る恐る、

「どうかしましたか?」

俺がそう言うとその人物はフードを取り始めた。

直後、目の前が真っ暗になった。

目が覚めるとそこは一本の道だった。

「なんだ、此処、」

そこは今までいた道路のような場所ではなく、コンクリートの壁に囲まれていた。そして前と後ろに先が見えないほどの道が続いていた。

(とりあえず前に進んでみるか、)

壁づたいに歩いていて。すると、20cm程の鳥が飛んでいるのが見えた。

(何でこんなところに鳥がいるんだ?)

鳥くピヨイピヨイ

(あく可愛いなく)

鳥に気を取られ、なにかに躓きコケてしまった。

「フア!？」

地面にダイブツ!

鳥くピヨイピヨイピヨイ

心なしか鳥が俺を見て笑っているような気がした。

「おい、笑ってんじゃねー」

そして、俺の周りを飛び回っていた。

(なんだこいつ何でこんなに俺の周りになるんだ?)

そして、目の前に柱のような物があった。

「なんだこれ?」

立ち上がりそれを良く見ようとすると、

鳥くピヨイピヨイ

とさっきの鳥が柱のような物の上に止まっていた。

しかし、柱のような物より高いところに止まっていることから、そこに何かがあることがわかる。

そこで、俺は手を伸ばしその何かを取ろうとしたら

鳥くピヨイ

と手を突かれた。

「イテツ、こいつめえ」

鳥は何か勝ち誇ったようにこつちを見ていた。

「お前がその気なら俺だってお前から盗ってやる」

俺は鳥の下にある物を狙って集中し始めた。

フツ、と言う息づかいと共に何かをかつさらった

鳥くピヨイ

「うっし、盗ったから俺の勝ちだな」

それは、陶器のようなものだった。

「なんだこれ？俺あんまこう言うの知らねえんだよな」

鳥くピヨイピヨイ

「お前、なに言ってるかわからねえよ」

と笑っていた。

「さて、とりあえずどうするかな？」

（このまま前に進むか後ろにも道があったんだよな）

「よし、後ろにいつてみるか」

それを聞いた、鳥は

鳥くピョーイピョーイ

と暴れ始めた。

「おい、どうしたんだよ」

鳥はピョイピョイと鳴き、前に飛んでいった。

「おい、待てよ〜」

俺は鳥を追いかけて行った。

鳥を追いかけていくと、足元が滑りやすくなっており転んでしまった。

「イツテ、今日全然ついてねえな」

そして、床を見てみると先程のコンクリートとは違いヌメツとしていた。

鳥くピョイピョイ

「おい、お前急いで進むぞ」

鳥くピョーイ

俺たちは凄いい速さで走って（飛んで）行った

すると目の前に扉があった。その扉からは光が射していた。

「扉だ、早く出るぞ」



俺は、走っている勢いそのまま前に押した。

扉に激突した。

「イッテ、本当に今日ついてねえなあ」

扉を引いて外に出た。

そこは大きな森の中だった。後ろを向いて見るとそこには何もなく本日三度目の恐怖だった。

あれから数日後、あのときの鳥とは一緒に住んでいる

ゲートと名付け、可愛がっている

最近ゲートの言葉がわかるようになってきた。

「何でお前と話せるんだ？」

するとゲートは笑っていた。